

第 21 回総会シンポジウム

2005 年 6 月 11 日 (土)
東京大学本郷キャンパス

「ドイツー戦後 60 年目の肖像」
司会

大貫敦子 (学習院大学)
西山暁義 (共立女子大学)
西山暁義 (共立女子大学)
渋谷哲也 (学習院大学)

第 21 回総会(2005 年 6 月 11 日)開催にあたって
映像と記憶

Aufwiedersehen Gestern. Die Vergangenheiten und die Politik von morgen

Michael Jeismann (Redakture der FAZ)

亀裂と統合

三好範英 (読売新聞)

Wie schreibt man Zeitgeschichte nach Auschwitz? Zum Selbstbild des wiedervereinten Deutschlands

石田勇治 (東京大学)

Der intellektuelle Reparaturprozess an den Schäden einer übereilten Vereinigung:

Der allmähliche Abschied vom machtpolitischen Denken

三島憲一 (東京経済大学)

コメント

石田 憲 (千葉大学)

第 21 回総会 (2005 年 6 月 11 日) 開催にあたって

西山暁義

1. 「戦後 60 年」

本年度は第 2 次世界大戦が終わってから 60 年、そしてまた「日本におけるドイツ年」ということもあり、例年とは異なり午前・午後とも「ドイツー戦後 60 年目の肖像」と題した統一プログラムを組むことになった。以下、その趣旨説明をおこなうにあたり、まず最近出版された歴史家ノルベルト・フライ氏のエッセイ『1945 年と我々』(Norbert Frei, 1945 und wir. München, 2005) から冒頭の一節を引用することにしたい。

「これほどヒトラーが姿を現したことはかつてなかった。第三帝国滅亡後 60 年を経た現在における「総統」のメディアへの登場は、地下壕における最期の数か月間の彼の公的なプレゼンスをはるかにしのぐだけではない。それはこれまでの数十年間における全てのヒトラーの流行を薄っぺらなものであったと思わせるほどである。映画、テレビ映像、そして回想録の氾濫は、我々戦後生まれの人間に「1945 年」という年を今まで以上に近づ

けているのである。」(7 ページ)

日本でも公開される『ヒトラー最期の 12 日間』をはじめとする映画作品、テレビ・ドキュメンタリー、さらに書店に陳列された夥しい関連書籍、ここ数年のメディアにおけるナチス時代の「過去」は、たしかに「氾濫状況」と表現しうるほどの規模である。しかし、改めて問うてみたいのは、なぜ 60 年たった今になって、このようなかつてない盛り上がりを見せるのかということであり、それが今回のシンポジウムを企画するに当たっての出発点であった。

時期の問題を考えるならば、60 年という歳月、すなわち 2 世代の時期を経て、ナチス時代の当事者世代が消滅しつつあるという事実が挙げられよう。むしろ、当事者世代の退場は今に始まったことではなく、以前より指摘されているところではあるが、ここ 10 年間における多くの当時の証言者の登場は、それがより現実味を帯び、明確に意識されてきたことを逆説的に示しているものと思われる。そしてこの証言のなかには加害者としてだけ

ではなく、被害者としてのものも多く含まれており、意識の内実自体もまた変化しているのである。いずれにせよ、今後さらに不可逆的に進んでいく「当事者なきドイツ」への流れのなかで、同伴する「過去の歴史化」、あるいは記憶から歴史への移行は注意深く観察していく必要があるだろう。

2. 「ドイツの肖像」

この歴史意識の問題は、現在のドイツの自己理解の問題でもあるわけであるが、そうであるならば、その主体である現在の「ドイツ」自体もまた、考察の対象にすえなければならぬ。すなわち、15年前の東西ドイツの統一、イスラム系移民の問題、ヨーロッパ統合の進展、そしてグローバル化、今回の報告者の一人である三好氏の言葉を借りれば、こうした内外の「統合と亀裂」に直面するドイツは、1945年、1949年、あるいは1989年のドイツとも同一のものではありえない。そうした認識をふまえ、過去の問題とともに、ここでは時間的、空間的に多層化、多形化された現在のドイツについてもあわせて考えていくことで、「戦後60年目のドイツの肖像」を立体的に浮かび上がらせたい、と考えている。

昨年度の総会開催にあたって広渡氏が指摘した「ドイツを相対的な比較のレベルにおく」という、ここ数年の日本ドイツ学会のシンポジウムの傾向に照らすと、今回のシンポジウムはそうした地域研究の方法論的模索というよりは、ドイツそのものを正面に据えており、きわめて古典的なテーマであるといえるかもしれない。しかし、これまでの方法論上の議論をふまえるならば、われわれがドイツに対して投げかける光もまた、20年前の学会創設期のものとは異なるものとなるだろう。あるいはまた、戦後60年の「ドイツの肖像」から反射した光は、創立21年目を迎えた日本ドイツ学会の像を結ぶ、と言い換えることもでき

よう。今回のシンポジウムが、方法論的模索との相互影響において進められるべき実践的テーマとして、日本においてドイツという地域を研究することの意味とは何か、という根本的な問題を改めて問う機会を提供できれば幸いである。

以上の趣旨から、今回の総会は冒頭で述べたとおり、午前・午後統一テーマのもと開催されることになった。まず午前の部では「映像と記憶」という題目で、ドイツ映画論を専門とする渋谷哲也氏に、1945年という節目（Stunde Null）を戦後の映画はどう描いてきたか、という観点から、シーンを上映しつつ解説していただく。

午後の部のシンポジウムでは、4人の方にご報告をお願いすることになった。ドイツからゲスト・スピーカーとしてお越しいただいたヤイスマン氏は、歴史家でありジャーナリストでもあるという立場から、戦後ドイツにおける歴史意識の問題を跡付けつつ、現在の「過去の歴史化」の有り様をヨーロッパ統合、福祉国家の危機、メディアの役割など現在のドイツが直面する問題のなかから分析する。最後に示される、トルコのEU加盟の条件としての過去との取り組み（具体的にはアルメニア人虐殺問題）の「ヨーロッパ化」という氏の見解は、議論を惹起することになるだろう。ジャーナリストとしてドイツ取材した三好氏には、上述のとおり「統合と亀裂」と題した報告において、とくに亀裂の事例として移民問題と統一後の旧東ドイツ社会が抱える問題について具体的に語っていただく。ホロコーストをジェノサイドの枠組みのなかで捉え直していく最近の研究動向を紹介、検討する石田勇治氏の報告は、まさに上述の地域研究の変化と呼応するものであるが、そうした歴史研究の「グローバル化」がドイツというコンテキストのなかでもつ意味という点からも、興味深いものとなるだろう。三島憲一氏は、15年

を経た統一ドイツの思想的潮流を批判的に振り返り、それを統一初期に支配的であった民族主義的思考から現在の世界市民主義の一定の定着への変化として捉える。そこに日本が東アジア諸国との関連において学ぶべき点があるとする指摘は、日本においてドイツを研

究する意味という点からも、傾聴すべきものといえよう。

今回は報告を充実させるため、コメントーターは特別用意せず、報告終了後、直接フロアから質問、意見をぶつけていただくことになった。活発な討論を期待したい。